

[原著論文]

## 大学生の異文化適応と心理的不安の変化に関する研究

川内 規会<sup>1)</sup>

### Change in Intercultural Adaptation and Anxiety of Japanese University Students.

Kie Kawauchi<sup>1)</sup>

#### Abstract

The purpose of this paper is to clarify the anxiety students feel with regard to intercultural communication before and after intercultural contact during study abroad and to evaluate the timeframe of intercultural adaptation.

The research presented here shows the anxiety felt over intercultural communication is quite different before and after intercultural contact has been experienced.

The main anxiety among university students that the research revealed was with interpersonal communication with the host family, the main concern being that the students felt that comprehending is not as important as communicating in the target language and this leads to anxiety.

As students tend to depend on their mother language even while staying abroad, their communication skills in the target language cannot develop by spending their time within their Japanese group. Nevertheless as far as language usage is concerned students feel that all of their language skills develop during their overseas experience. In addition to this, their anxiety with using the language is gradually reduced and 80% of students adjust to using English within 2 weeks. The main reason for this adjustment is not their level of English, but in the reduction of their anxiety.

This study attempts to make clear what problems need to be overcome for the adjustment into intercultural interaction and through this we can grasp the characteristics of the youth of today.

(J. Aomori Univ. Health Welf. 7(1): 37-44, 2006)

キーワード：異文化適応、心理的不安、海外語学研修

Key words : intercultural adaptation, communication anxiety, study abroad.

#### I. はじめに

文部科学省は2005年の国際交流促進に向けた施策の動向と展開として、留学生交流の推進を挙げている。その中で日本人学生の海外留学の現状を紹介しているが、統計<sup>注1)</sup>によると海外に留学した日本人は主要33カ国で約7万9千人であり、年々増加している傾向が見られている。国際交流が盛んになりグローバルな視点が問われるようになって以来、授業の一環として短期海外語学研修を設けている大学も少なくない。若い世代である学生たちにとって異文化を体験することは、価値観の再認識、文化的同一性の発見、自他意識の高揚、心理的自立が確

立される転換期と言えるであろう。また、この時期におけるものの見方の変化や新鮮な感動は、将来の方向性を決める大きなきっかけにもなり得る。

青森県立保健大学は「English Communication」と呼ばれる海外語学研修を2単位の選択科目として設けており、2000年からオーストラリアで実施しており、2004年からイギリスが追加され、それぞれ3週間の研修が実施されている。その目的は、「コミュニケーション・スキルの向上、異文化理解と異文化接触を通して国際的な視野を養う、自信と自立」などがあげられ、語学力の上達のみが目的ではなくコミュニケーション手段として英語を

1) 青森県立保健大学健康科学部人間総合科学科目

Division of Human Sciences, Faculty of Health Sciences, Aomori University of Health and Welfare.

使用しながら、自文化・異文化を認識し異文化適応を試みる貴重な経験をすることにある。

多くの学生が日常の生活から離れ異文化環境に入り込んだときの心理的反応として少なからずコミュニケーション不安をいだく。特にホームステイという日常生活の経験は、母国語を介在する余地がないため学生が一番不安に思うところである。大半の学生は不安を抱えながら少しずつ異文化認識し受容するが、最後まで異文化適応できずに悩みながら過ごし続ける学生もいる。しかしその現象は特異ではなく、異文化適応できずに帰国する例は珍しいことではない。そこには現代の学生の感性の問題と耐性の弱さが現れてくる。現代の学生の精神面をより理解するために、適応状況や心理的不安原因を把握することが、効果的な海外研修が行われるために必要であると考えられる。

本調査は本学の「English Communication」授業が2004年度で5年目を迎えた事をきっかけとし、過去5年間の大学生の海外語学研修を通して異文化接触時における心理的不安と異文化適応の実態調査を実施した。また、他大学の学生の異文化適応状況を把握すべく、青森市内の大学および短期大学主催の海外語学研修に参加した学生から聞き取り調査を実施し、現代の学生のコミュニケーションのあり方に関する特徴を考察した。

## II. 異文化適応の要因

マツモトは「日本人の国際適応力(1999)」<sup>1)</sup>の中で、サンフランシスコ州立大学にある異文化感情研究所が過去30年間の心理学の文献に現れた異文化適応に影響のある主要要素を調べた結果、事前の異文化体験、異文化に対する態度、社会的支援、柔軟性など、文化の違いをいかに捉えるかに焦点をあてたものが挙げられていることを示している。さらにマツモトは、異文化適応における成功・不成功を決定する最も重要なプロセスの一つは、自分および相手の感情の処理の仕方であるとしている。異文化における葛藤、不安が避けられない以上、この葛藤を解決する方法によって、成功・不成功が決まるといっているのである。

また、海外生活に適応するには、生きていくうえでのサポートネットワークが大切であることを宗像(1994)<sup>2)</sup>は強調している。在外邦人1,099名から得たメンタルヘルス実態調査の結果から、日常の生活において、手段的な面で支援してくれる人や情緒的な面で支援してくれる人がいることでストレスが乗り越えられるといわれている。

短期間異文化接触をする人の精神的不安感の質は、長期滞在者のそれとは異なることは推測されるが、根本的な意識として長期・短期にこだわらず、異文化接触した

人が情緒的、精神的支援を願っている可能性は否定できない。異文化における葛藤、不安を解決する方法や、不安要素の認識度によって異文化適応の成功・不成功が決まると考えるなら、初期段階として異文化接触する前の不安と、異文化接触後の不安を正確に受け止め、解決策を検討することは異文化適応が柔軟に行われるための大切なプロセスであると考えられる。

## III. 研究目的

本調査は異文化適応が柔軟に行われるための解決策を導き出す初期段階として、大学生の短期海外研修における不安感の変化と実態を把握することを目的としている。心理的不安原因を追求しながら、いかに学生が異文化に適応していくものかコミュニケーション行為の実状から調査するものである。即ち学生が初めて経験する異文化相互作用における適応状態を把握し、学生の心理的不安の原因や問題点を明らかにした上で、現代の学生の特徴を把握することを目指している。

## IV. 研究方法

アンケート調査による異文化接触時の意識調査と、聞き取り調査による異文化接触前・後の心理的变化および適応状況を調査した。

### 1. アンケート調査

アンケート調査は2000年から2004年の過去5年間に毎年行われ、青森県立保健大学の海外研修終了後1週間以内に実施された。調査用紙は海外研修を経験した同大学の学生195名に配布し138名から回答があり、回収率は70.8%であった。対象者の専攻は看護学科、理学療法学科、社会福祉学科の3学科で、社会人入学の学生6名を含むすべて2年生である。研修先はオーストラリアおよびイギリスで3週間のホームステイを経験している。学生と持続的に接触している点から、主にホストファミリーとの接触を調査対象とした。調査内容は、異文化適応が可能となった時期、不適応状況とその詳細、コミュニケーション・スキルの認知、母国語依存度などである。

### 2. 聞き取り調査

聞き取り調査は2004年に実施され、調査方法は1対1のインタビュー形式で行われた。対象者は青森市内の4年制大学4大学および短期大学1大学から大学主催の海外研修参加学生13名である。専攻は、経営法学科、現代コミュニケーション学科、看護学科、経営学科、医療薬学科、経営経済学科とさまざま、学年も1年生から4年生まで幅広い。対象者の研修先は、アメリカ、イギリス、中国、オーストラリアで、期間は2週間、3週間、1ヶ月と短期研修が大半であるが、中国の対象者は1年間の研修である。カリキュラム内容は、午前は各大学・

語学学校で授業を受けているが、午後は13名中5名が2時間程度の授業を受けており、他8名は自由行動または自主研修<sup>注2)</sup>となっている。クラス編成は日本人だけのクラスが7名、他の国の人と混合のクラスが6名である。対象者の研修先、期間、カリキュラム内容は異なるが、はじめての異文化接触という点では共通していると判断し同じ調査を行っている。調査内容は、それぞれの大学の事前研修の有無とその詳細、異文化接触前・後の心理的不安内容とその原因、異文化適応が困難であった事例などが中心である。

## V. 結果

### 1. アンケート調査の結果

はじめに、異文化接触前の心理的不安として挙げられていた項目に関しては、「食生活」、「生活習慣の違い」、「交通機関」、「事故」<sup>注3)</sup>、「授業（大学・語学学校による）」など多様であったが、これらの項目の上位に「ホストファミリーとの対応」が挙げられていた。言語の不安、考え方の違い、共同生活の不安などさまざまな要因が含まれており、対人コミュニケーションの難しさが異文化において一層際立ったと思われる。

学生がホストファミリーとの対応に不安を抱いていたことに関連して、ホストファミリーと緊張がほぐれた状態でコミュニケーションをはかることができた時期を調べた。結果は図1を参照されたい。「2、3日後」29%、「1週間後」27%、「会ったその時点から」と「2週間後」は同数の14%となった。つまり、1週間後までに70%の学生が、2週間後までには84%の学生が、緊張せずに自然なコミュニケーションができたと感じていた。一方、「3週間後」7%、「最期まで対応できなかった」9%、合計16%の学生は自分の満足するコミュニケーションができずに帰国していることがわかる。

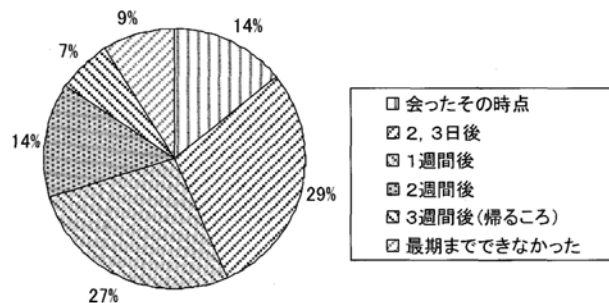


図1 緊張せずにホストファミリーとコミュニケーションがとれた時期

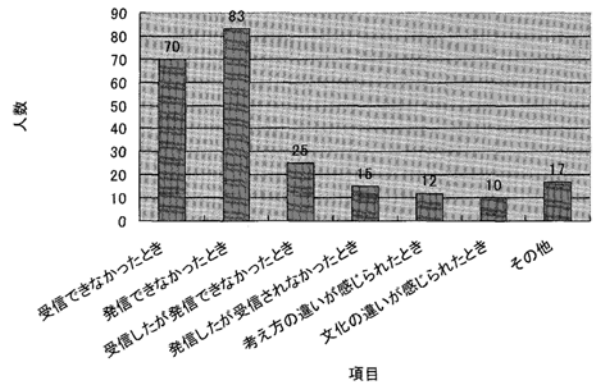


図2 ホームステイ先でコミュニケーションがとれなかった状況

次に、ホームステイ先でコミュニケーションがとれなかったと思われる状況の調査では、図2のような結果となった。「発信できなかったとき」と回答した学生が83名、以下「受信できなかったとき」70名、「受信したが発信できなかったとき」25名、「発信したが受信されなかったとき」15名の順となった。一見、言語運用の問題のみが上位を占めたように感じられるが、「受信したが発信できなかった」という回答は、相手の言っている内容は理解したが返答できなかった状況であり、必ずしも言語運用能力のみが原因ではないと考えられる。同様に、「発信したが受信されなかった」という回答も、伝えつもりだったが誤解された例や、伝え内容が受け入れられなかった例もあり、原因となる要因は広域にわたって考えられる。また、「考え方の違いが感じられたとき」12名、「文化の違いが感じられたとき」10名のように言語運用以外の問題をあらかじめ指摘した学生もいた。

続いて、研修前に学ぶべきであった項目に対する回答では、図3を参照されたい。半数の学生が「単語力の増加」76名、「日常の英会話」69名、と回答し、3分の1の学生が「リスニングの練習」43名、と回答していることから、英語運用能力の乏しさを感じたようである。また、「自国の歴史や文化」39名や、「訪問国の歴史や文化」25名、に関しては、学生が異文化に接触する前にさほど重要視していなかった項目であり、その答えられなかった項目の内訳は、「過去の歴史的事実、日本の経済的立場、義務教育の詳細、現在の医療のあり方、福祉の現状、定年制度、国（地域）の政策など」であった。これらは後述の聞き取り調査にも関係しており、興味深い回答である。

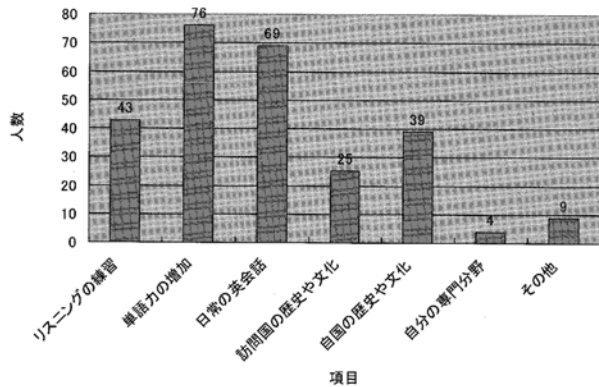


図3 研修前に学ぶべきであった項目

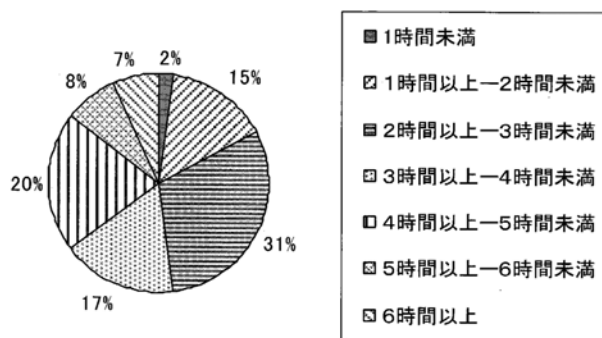


図4 日本語の使用時間

次に、ホームステイ期間中の1日の母国語使用頻度を調べた。結果は図4をご覧ください。日本語の使用時間が1時間未満は2%と少なく、1時間以上2時間未満が15%、2時間以上3時間未満では31%と最も多い回答であった。また3時間以上4時間未満が17%、4時間以上5時間未満が20%となり、2時間から5時間未満で68%と半数以上をしめていることになる。この結果から、語学研修先の授業では英語が使用されていても、自由な時間になると日本人は集まり母国語を使用している様子が見られる。この結果に関しては、日本人学生同士の行動が多いことは、他のアンケート項目の回答にもあり合致しているところである。

## 2. 聞き取り調査の結果

聞き取り調査では、異文化接触前と異文化接触後では不安内容が異なる結果が現れた。また、事前研修を受けた学生と受けていない学生との間にも異文化適応状況の違いが現れた。

はじめに、異文化接触前の心理的不安内容に関して、聞き取り調査の対象であった13名中9名が「英語が通じかどうか」、「英語で自分の考えが伝えられるかどうか」を心配であったと答えている。また5名の学生は英語という言語の心配ではなく「ホストファミリーと仲良くできるか」、「性格が合うか」、「自分を受け入れてくれるか」

など、人間関係に不安を抱いていた。

異文化接触前の事前研修を受けている学生と、受けていない学生を比較したところ、事前研修を受け、研修先の情報を与えられた学生は、多くの情報から自分に関わる問題点や不安原因を把握しており、不安内容が限定されていた。例えば、生活環境の違い、生活習慣の違い（公衆トイレ、公衆電話の使用）、ホームステイのマナー、税関の手続き、文化的背景などを挙げており、情報提供を受けたうえで自分の中の不安な材料を明確にしていた。

一方、異文化接触前の事前研修を受けていない学生はまったく不安がないと答えていたり、比較的漠然とした内容、例えば飛行機事故、多発テロの影響<sup>注4)</sup>などを不安と答えていた。

また、事前研修を受けている学生は、受けていない学生より不安感は少ないと考えがちであるが、むしろ事前研修を受けている学生のほうが不安感は多かった。各自が研修国の生活をあらかじめイメージした結果、具体的な疑問点が沸き不安材料が増えたためと思われる。

異文化接触後の不安内容に関する比較では、事前研修を受けた学生は、研修以前に持っていた不安感を現地で即座に解決し、簡単に日常生活に溶け込んでいた。これは、ある程度予測をしていた基本的な不安要因であったため、異文化受容しやすく、すぐに解決できたものと思われる。しかし、これらの学生は現地でさらなる新しい不安要因が別の角度からでてきている。例えば、健康面（風邪で病院に行くことになった、ホームステイ先で子供がとびかき首を捻挫した）や、語学の進歩（日本語を頻繁に使用していたが英語力がつくのか、3週間で英語は話せるようになるのか、中国語を学んでいたが自分の学力が平均的であるかどうか、中国語を生かした仕事に就けるレベルに達しているかどうか）や、ホストファミリーとの関係（地方なまりがあり苦勞した、宗教的な勧誘があり困った、ホストファミリーが自分の英語を理解できないと無視するようになった、プライバシーを守ってくれない、感情がうまく表現できない）など異文化接触後の不安内容はかなり異なるものとなった。一方、事前研修を受けていない学生の異文化接触後の不安内容は、事前研修を受けた学生の得た情報のレベルから現れ、解決に時間がかかっている。例えば、気候や生活環境の違い、生活習慣の違い（チップ、公衆電話の使用、紙幣の両替）、交通機関等のように基本的なものが大半を占めた。僅かながら、「他の外国人留学生と接触がなく孤立した」、「ホストファミリーから注意を受けることが多く何も言えなくなった」という例も見られた。以上の結果から、異文化接触前と接触後の心理的不安内容が異なる上に、事前研修の有無により、その不安内容はさらに大き

く変化することが明らかになった。

最後に、言語運用能力以外の点で異文化接触時の適応過程に焦点を当てていたところ、13名中5名が、ホストファミリーとの会話や語学研修の授業中に自国の現状や歴史等を聞かれ説明できなかったことを挙げており、語学とは異なる基礎知識の学習が必要であったと感じていた。これは、前述V-1の図3の項目にも合致している。

また、2名の学生は、日本ではほとんど積極的に話すことができない性格であったのに、異文化に触れた途端に自分から積極的に話すようになったと述べており、明るい性格になったような気がしたと表現していた。少数回答ではあるが性格が変わったような言動が現れることに関しては、異文化接触時における特記すべき傾向である。

#### IV. 考察

母国語使用頻度から学生の不安感を考察すると、かつてから批判の対象となっていた「日本人学生が集団で海外研修に行った場合に日本人同士が集まって日本語使用している傾向」(鳥飼, 1996)<sup>3)</sup>は、今回の調査においては現代でも変わっていないことがわかる。また、聞き取り調査では、「ホストファミリーと少し英語を使うだけで、それ以外は日本人と共に週末のツアーに参加し独力で公共の機関を利用することはなかった」と回答している学生が7割近く存在していた。日本語を頼り、日本人に頼って生活している学生の環境からは、不安感や自立心というものは、依存によって芽生えなかったものと考ええる。異文化体験を名目に、自己責任のない旅行気分の楽しみは達成されるであろうが、自立、独立、責任、不安という一連のつながりが、集団という枠に制限され発展が見られなかったように思われる。

さらに今回の調査から、学生の異文化コミュニケーションにおける心理的な不安の原因を分析すると、英語そのものの語学レベルは必然的に問われるが、語学のレベルのみならず、異文化適応に関係するコミュニケーション能力<sup>5)</sup>が重要な要因であることがわかる。

ルーベン (Ruben, 1976)<sup>4)</sup>は、コミュニケーション能力に関して、異文化適応に関係する7つの能力<sup>6)</sup>を抽出している。それらはa. 敬意伝達能力、b. 価値判断抑制能力、c. 知識運用能力、d. 感情移入能力、e. 役割行動能力、f. 相互交流管理能力、g. 状況即応能力である。しかし、ニシダ (Nishida, 1985)<sup>5)</sup>は、米国に短期滞在した日本人学生を対象に調査した結果から、ルーベンの提唱した7つの能力は適切に機能していなかったと指摘している。その理由として、滞在期間(短期滞在)や能力そのものの問題を指摘しており、a. 敬

意伝達能力、b. 価値判断抑制能力、d. 感情移入能力、f. 相互交流管理能力、には相手との間の共通の言語を理解できる上に、様々な状況における適切な言語表現を理解できる能力を意味することになるといわれている。このために日本人学生が日本語を使用した場合と、英語を使用した場合とでは能力に大きな違いが出ることが指摘されている。そこで本調査では、比較的使用言語に大きな違いが見られないと推測されるc. 知識運用能力と、g. 状況即応能力に焦点を当て、さらに、言語使用の能力の差を考慮に入れながらも、異文化接触時に学生が確実に重要となると考えられるd. 感情移入能力についての3つの能力に焦点を当てて考察していくこととする。

「知識運用能力」は、ものの見方、知識・感情の表現の仕方は文化によって異なることを理解できる能力のことであり、基礎知識を表現できない場合は異文化に適應する十分なコミュニケーションがとれないという結果があらわれている。つまり、V-1の図2および図3から異文化間で行われるコミュニケーションではその背景となる文化や歴史、現状を表現できないことが原因で、相互の意見交換ができなかったことを学生は認知している。また、感情の表現方法がわからず、十分に意思を伝えられずにあきらめてしまうケースもある。前述の聞き取り調査でも同様の結果があらわれており、語学とは異なる感情表現の違いやものの捉え方の違いを認識し対応できることが大切である。また、「感情移入能力」は、相手の立場に立って考えることができる能力であるが、日本人学生の言動をまとめてみると、自分たちの行動で精一杯であり、ホストファミリーや他国の隣人、身近な人々を気遣ったり配慮ができる心のゆとりはなかったように思われる。コミュニケーションの基本である相手を理解しようとする行為が行われておらず、近所の人やクラスの人には、聞き流して済ませたという回答もあり、自分に関わる一人一人の立場や気持ちを考える行動ができていたようには捉えられない。また、理解しようとする気持ちを持っていたとしても、それを上手に表現できる能力が磨かれていない可能性が高いことが考えられる。さらに、「状況即応能力」に関しては、未知の状況に神経質になったり、不安を抱いたりせずすばやく適応できる能力であり、まさに現代の学生に兼ね備えてほしい柔軟性のある能力といえる。心理的な不安感を引きずり過ぎたり、異文化適応ができずに帰国する学生の傾向は、他の学生に比べ多くの項目に対して不安感を示していたことから、状況即応能力が低い傾向があることが考えられる。これらの不足傾向のある諸能力を身につけるには、学生の心理的な不安原因を確認し把握しながら、多くの可能性に対処できる能力を日ごろから養いつつ、異文化適応

能力の基本的知識を積み上げていくことが必要であると考える。

また、異文化適応時の変化として、前項の聞き取り調査の結果で2名の学生が、日本では積極的に話すことができない性格であったのに、異文化に触れた途端にコミュニケーションがとれるようになり自分から話すようになったと述べており、明るい性格になったような気がしたと回答している。今回の調査では少数であるが、大変興味深い変化であり、また、一般的にはしばしば見られる傾向ともいえる。日本人は英語を使用して話をするとき、日本人同士または、外国人と話す場合でも周りに日本人が数人いるケースでは、英語の間違いを恐れ、発音を気にし、話し出そうとしなくなる傾向がある。また、外国人の中に1人でも日本人の知り合いがいると感じると、自己開示もできなくなる傾向がある。これは間違える行為を恥ずかしいと感じ、沈黙は金という思想を持ち(金田一, 1975)<sup>6)</sup>、周囲に対して「甘え、察し」の心理構造がなりたち(成毛, 1989)<sup>7)</sup>、英語という言葉を用いることができず劣等感を持つ(鳥飼, 1996)<sup>8)</sup>というさまざまな日本人特有な現象を裏付けている。しかし外国人の中に日本人が1人入ると、恥ずかしさは消え、自分なりの説明をしようと努力する傾向がある。また、必要以上にテンションがあがり普段と異なる自分を出している場合も多い。日常生活から離れた異文化に自分は溶け込んだと感じ、異文化適応した普段と異なる自分を発見したように感じる人もいる。これらは、バーガー(Berger, 1979)<sup>9)</sup>が中心となって提唱した不確実性減少理論(Anxiety Uncertainty Management Theory)が関係していると思われる。人間関係の親密度からみた諸段階、つまりエントリー・フェイズ(人間関係の始まる段階)、パーソナル・フェイズ(個人化する段階)、エキシット・フェイズ(人間関係の壊れる段階)の現象を説明するために、第一段階であるエントリーの段階において、不確実性という概念を中心に構築されたものである。知らない人同士が会ったときに不確実な部分を減少させる行為、つまり知らない部分を埋めていくという過程で、不確実性を減少させる戦略があり、受動的、活動的、相互作用的の3つがあるとバーガー<sup>9)</sup>は説明している。この不確実性を減少させる要素は、日本人同士や知り合いである場合の要素と、全く知らない土地で知らない人と接する異文化の状況では要素が異なる。前述の学生が積極的に話し明るい性格になったと感じたのは、エントリー・フェイズにおいて、活動的・相互作用的戦略が施されたものと思われる。一方、母国の生活では受動的戦略が強かったのではないかと考えられる。

最後に、本調査では異文化接触前と異文化接触後で心

理的不安内容が異なるという事実と詳細が明らかになった。また、事前研修の有無によりこれらの不安内容がさらに大きく変化するという側面も明確になったが、事前研修は自力で訪問国や異文化を理解しようとする動機付けになっているため、心理的不安原因を探る上でも重要な役割を果たしていることが分かる。学生の不安内容がどの範疇であるかを自覚させ、いかに対応すべきかを学生本人に考えさせる時間を設けることが研修に対する大きなモチベーションになっているといえる。また、調査結果から鑑みて今後は事前研修のあり方をホームステイの情報や出入国方法の情報提供に執着せず、目的意識を明確にさせるための問題提起をしつつ、自国と訪問国の基礎知識を各自に再認識させる時間を与えられるような方向に進むよう検討し続けることが望ましいと思われる。特に学生が海外の団体旅行と同等に捉え、疑問や不安を持たずに大学の海外研修に加わることは避けられるべきであり、短い期間で得られる情報量は各個人の問題意識に大きく左右されることを学生自身が把握する必要があると考える。

## Ⅶ. まとめ

現代の学生は英語に触れる機会が多く情報量が豊富な上に、長年の英語教育も実践が重視されるようになったため、かつてのように対人コミュニケーションにおいて消極的な者<sup>(注7)</sup>は少ないと思われがちである。しかし、今回の調査結果を見るとコミュニケーション能力の基盤となる基礎知識や常識が欠けていたことが原因となり、学生が思うようにコミュニケーションをとれないという傾向がみられた。必ずしも、現代の学生がコミュニケーションに積極的に十分に実践が伴っているとはいえない一面である。学生は異文化に適應するために、英語運用能力だけではなく状況把握の能力や感情を伝える力、基礎知識などが必要であることを感じとっていた。「察し」のコミュニケーションから「語る」ことに重きをおく国際社会(北出, 1997)<sup>10)</sup>に対応するには、どんな能力を養う必要があるのかを知る手がかりとなったのではないかと思われる。

また、事前研修のあり方が学生の心理的不安内容を変えようという結果から、それぞれの大学で事前研修の見直しが十分に行われる事を願うのと同時に、研修の動機付けである第一歩が国内で始まっていることを再認識しなければならないと考える。学生の実態調査を通して、現行の海外研修のあり方を見直すきっかけになることを期待している。

## 謝辞

本研究は平成16年度青森県立保健大学健康科学特別研

究費の助成を受けた研究結果の一部であることを付記し、調査にご協力くださった学生の皆様および海外研修担当の先生方に深く感謝申し上げます。

(受理日：平成18年5月25日)

### 注

注1) IIE「OPEN DOORS」、中国教育部及びOECD「Education at a Glance」各2002年版、CBIE（カナダ国際教育ビューロー）2001年版による。

注2) 自主研修の中には、クラス単位で時間は設けられていないが、課題を受けて各自が取り組む形態も含まれている。

注3) 多発テロ事件が起きた1年または2年後の研修となった学生から、飛行機事故や現地のトラブルを心配している回答があった。

注4) 学生は多発テロを漠然とした恐怖という意味で答えており、自分なりの考えや具体的な地域を挙げた回答ではなかった。

注5) 本調査におけるコミュニケーション能力とは、自分と相手の間で意思疎通ができ会話が続く状態を表し、一方的な情報伝達にならない状況を示している。

注6) Ruben, B. D. (1976). Assessing communication competency for intercultural adaptation. の中で、コミュニケーション能力に関する調査・研究として、異文化適応に関係する7つの能力 a. Display of Respect, b. Interaction Posture, c. Orientation to Knowledge, d. Empathy, e. Role Behavior, f. Interaction Management, g. Tolerance of Ambiguity を抽出している。

注7) バーンランド (1975) は日本人の学生に対する意識調査を行い、コミュニケーションから見た日本人のプロフィールを「遠慮する・改まっている・黙りがち・用心深い・つかみどころがない・真面目」の順で報告している。

### 引用文献

- 1) マツモト・デーヴィッド：日本人の国際適応力。本の友社，1999。
- 2) 宗像恒次：海外生活者のメンタルヘルス。法研，1994。
- 3) 鳥飼玖美子：異文化をこえる英語—日本人はなぜ話せないか。丸善ライブラリー，1996。
- 4) Ruben, B. D. : Assessing communication competency for intercultural adaptation. *Group and Organization Studies*, 1 (3), 334-345, 1976.
- 5) Nishida, H. : Japanese intercultural communication competence and cross-cultural adjustment. *International Journal of Intercultural Relations*, 9, 1985.

*tional Journal of Intercultural Relations*, 9, 1985.

6) 金田一春彦：日本人の言語表現。講談社，1975。

7) 成毛信男： *Human Communication Studies*. 桜門書房，1989。

8) 鳥飼玖美子：異文化をこえる英語—日本人はなぜ話せないか。丸善ライブラリー，1996。

9) Berger, C. R. : Beyond initial interactions. In H. Giles & R. St. Clair (Eds.), *Language and Social Psychology*. Oxford, UK : Basil Blackwell, 1979.

10) 北出亮：日本人の国際コミュニケーション。近代文芸社，1997。

### 参考文献

Ruben, B. D. & Kealey, D. J. : Behavioral assessment of communication competency and the prediction of cross-cultural adaptation. *International Journal of Intercultural Relations*, 3, 21-22, 1979.